

地質屋, 温家宝中国首相

須藤 茂¹⁾

1. はじめに

2003年3月17日の朝刊一面を見たときの「おおっ」という驚きは今でも覚えています。見出しは、「中国首相に温家宝氏」、内容は、「中国の全国人民代表大会で、温家宝副首相が新たな首相に選出された。信任投票の賛成票は99.4%で、前任者の98%、前前任者の88.6%を上回った。温家宝首相は、元は測量技術者で、調整型の実務化肌。副首相として、貧困地域を幅広く回るなど経験をつんできた。」といった具合でした。さらに人物紹介として、「北京地質学院の大学院で地質構造学を専攻した後、68年から西北部の甘肅省地質局に赴任。地質の研究で成果を上げ地質鉱産省次官に。」とありました。ほおっ、地質の研究で成果を上げ、ついには中国の首相か、と驚いたものです。別に我々日本の地質屋が何か努力をしたために彼が中国の首相になったわけではなく、その点においては何の関係もないのですが、ただ同業者がそうだったというだけで驚いたのでしょう。

さらに記憶があいまいになります。この辺が平凡な地質屋の浅はかなところです。その前の年、2002年11月16日の新聞を見たときにも驚いたことをすっかり忘れていたのです。やはり朝刊一面でした。そこには、「指導部9人 全員理系」の見出しと、「中国共産党の新指導部、常務委員9人は全員が理科系大卒の学歴を持つ。(副首相)温家宝氏は北京地質学院で大学院まで進み、就職後に地質構造の学術論文を発表した。」とあったのです。

地質構造の学術論文を発表し、地質の研究で成果を上げた人物のことならば、何かもう少し詳しい話がわかるかなと、簡単に調べてみることにしました。読者をじらしてしまうとしかられるので最初に結論を書

いておきます。簡単に調べることはできませんでした。したがってここには詳しい記載はありません。

毛沢東の本はたくさんあります。周恩来も、鄧小平も、江沢民も、胡錦濤もあります。しかしながら、温家宝(Wen Jiabao)のことを主に扱った日本語の本は見つけられませんでした。

インターネットの時代です。検索してみました。問題点が2つありました。第1に、中国語が理解できないとほとんど先に進めません。第2に、日本人が書いたと思われる温家宝に関する記載は、2次、3次、4次情報ばかりで、ほとんどどの役にも立ちません。出展が明記されていない孫引き情報のオンパレードです。というわけで、簡単に調べることができなかったのです。

2. 履歴書

まず、硬い紹介として、雑誌「人民中国」2007年4月号に掲載された、訪日直前の資料から引用します。()内は、日本外務省のホームページの、[]内は新華社のネットの記載です。

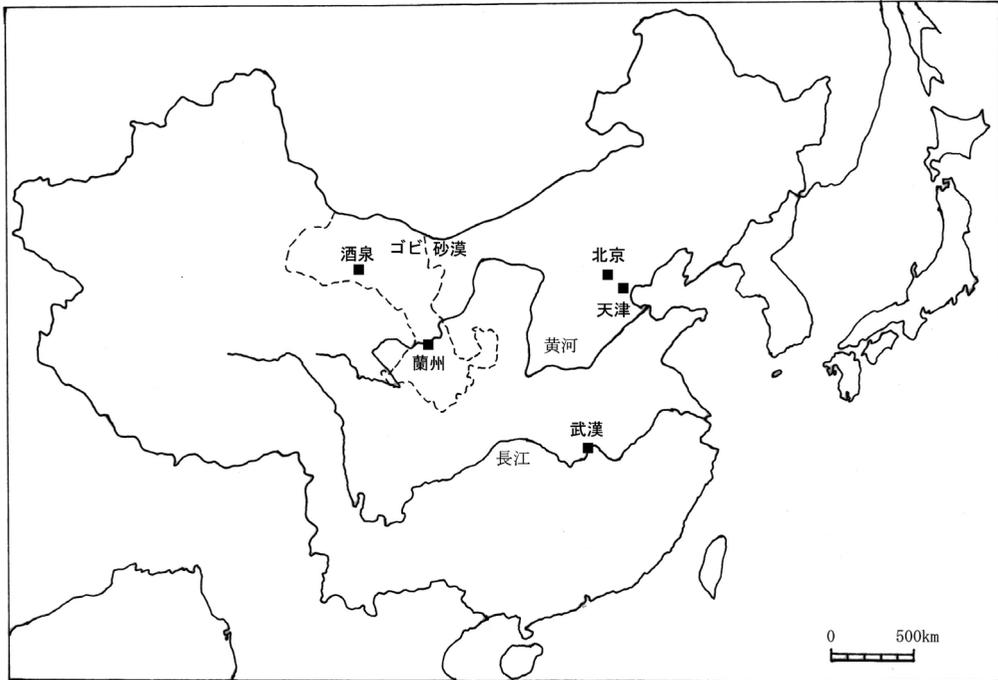
漢族、1942年9月、天津生まれ。1965年4月、中国共産党に入党。1967年9月、就職。北京地質学院地質構造専攻、卒業。学歴、修士、エンジニア[エンジニア]。

現在、中国共産党中央政治局常務委員、國務院総理。(序列第3位)

1960～65年、北京地質学院地質鉱産一学部[一系]で地質測量・探鉱を専攻(地質鉱産第1学科地質測量及び探鉱コース)。

1) 産総研 地質情報研究部門

キーワード: 地質屋, 温家宝, 中国首相, 天津南開中学, 北京地質学院, 中国地質大学, 甘肅省地質局, 地質鉱産部, 中国地質調査局, 中国地質博物館



第1図 温家宝関係中国案内図. 破線で囲んだのが甘肅省です.

1965～68年, 北京地質学院地質構造専攻修士課程 (地質構造コース研究生).

1968～78年, 甘肅省地質局地質力学隊技術員 (地質力学区域測量隊技術員), 政治幹事, 隊政治処責任者 (隊政治処責者).

1978～79年, 甘肅省地質局地質力学隊党委員会常務委員, 副隊長.

1979～81年, 甘肅省地質局副処長, エンジニア [工程師].

1981～82年, 甘肅省地質局副局長.

1982～83年, 地質鉱産部政策法規研究室主任, 党指導グループメンバー (党組メンバー) [党組成員].

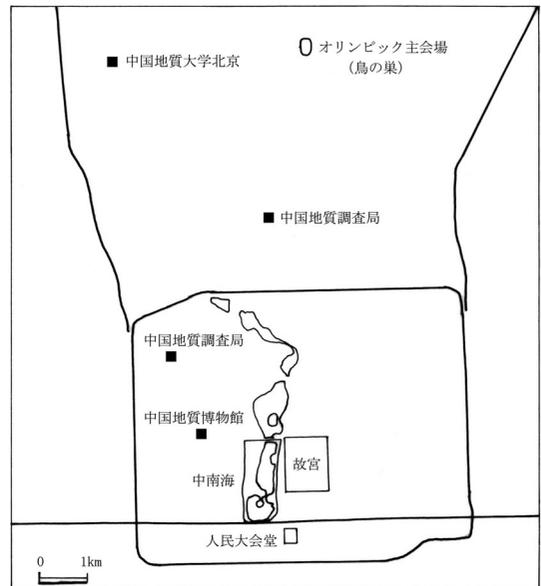
1983～85年, 地質鉱産部副部長, 党指導グループメンバー, 党指導グループ副書記兼政治部主任. (党組副書記兼政治部主任)

1985～86年, 中央弁公庁副主任.

1986～87年, 中央弁公庁主任.

1987～92年, 中央書記処候補書記兼中央弁公庁主任, 中央直属機関工作委員会書記.

1992～93年, 中央政治局候補委員, 中央書記処書記, 中央弁公庁主任, 中央直属機関工作委員会書記.



第2図 温家宝関係北京案内図. 太線は地下鉄路線です.

1993～97年, 中央政治局候補委員, 中央書記処書記.

1997～98年, 中央政治局委員, 中央書記処書記.

1998～2002年, 中央政治局委員, 中央書記処書記.

記、国務院副総理、党指導グループメンバー、中央金融工作委員会書記。(1998年、全国緑化委員会主任、同年、国家防汛(防ジン)(洪水防止;雑誌人民中国による、筆者注)抗旱総指揮部総指揮、同年、国務院扶貧開発領導小組組長)

2002年、中央政治局常務委員、国務院副総理、党指導グループメンバー、中央金融工作委員会書記。

2003年3月、国務院総理に就任。

以上です。関係する地名を入れた中国と北京の地図を第1, 2図に示します。

3. 大学まで

以下、主として人民中国2003年記載の、21世紀経済報道という新聞からの引用記事の引用の形で簡単に紹介します。このほかの出展不明の記載には(が)印をつけました。

祖父も父母も、みな教師で農村の教育者の家柄だとのことです(が)。幼年時代を戦乱の中で過ごしました。家屋敷も、祖父が自分で開いた小学校もみな戦火で破壊されたとの記載があります。中学・高校の六年間天津の南開中学で学びました。この中学校は、何と日本のごく普通の観光ガイドブックに記載されていました。市のほぼ中心部にあります。周恩来の紹介文の中に出てきます。周恩来の母校なのです。全く同じ学校であるかどうかはわかりませんでした。学制が違う可能性もあります。鄒家華・元副総理も同窓生とのことです。

北京地質学院に入学します。現在の中国の大学進学率は20%を越えているようですが、これは最近急激に学生数が増やされた結果であり、当時の進学率は1%のオーダーであったと思われます。北京地質学院には、合併と分離の歴史があります。1952年、4つの大学の地質関連部門が統合され、北京地質学院(Beijing College of Geology)ができました。この大学は、その後、一時、武漢へ移転しました。1987年に中国地質大学(China University of Geosciences)北京と中国地質大学武漢がそれぞれ分離独立しました。略称は地大です。過去50年間で4万人、7万人あるいは8万人の卒業生を出してきました。このほかに北京には、中国石油大学と中国鋳業大学があります。これら3大学とも1993年に開始された211工程(プロジ

ェクト)、国内先進レベルに位置すべく重点化された107大学に入っています。このほか総合大学である北京大学にも地球物理と地質の学部があります。現在の中国地質大学北京は、北京市内の北西部にあります。向かいには中国科技大学が位置し、中国石油大学、中国鋳業大学、清華大学、北京大学なども近くにあり、学園地区の一角を占めています。

修士課程に進みます。進学者の割合はさらに少なかったようです。この間、何を学んだのかは、わかりません。

周恩来について記載した本の中に、北京地質学院の名前を見つけました(高, 2007)。ドキッとしました。1966年12月下旬、文化大革命側の指導者から、ある幹部を地方から北京に連れてきて批判闘争にかけろという指示が、北京地質学院と航空学院の造反派の学生に出されたというものです。このことを知った周恩来は、その幹部を丁重に扱うように指示を出したとの記載があります。この本の中に出てくる大学名は、ほかには北京大学と精華大学だけです。その頃、温家宝が何をしていたのか、何をさせられていたのかは全くわかりません。

4. 卒業後

1968年2月、大学院在学中に現場に出ます。甘粛省の北西部にある酒泉です。祁連山との記載もあります。酒泉の南にある5,000m級の、氷河を頂く山並みのことです。その辺に鋳山があるようですが、よくわかりません。甘粛省では、ニッケル、亜鉛、コバルト、白金、イリジウム、銅、アンチモンなどが開発されているとの情報もありますが、位置関係はよくわかりませんでした。酒泉は万里の長城の西の端にあたります。ゴビ砂漠の南です。甘粛省は、面積が45万平方km以上あります。州都蘭州は南東部にあり、州の北西端には敦煌があります。実際にどこで何をしたのかはわかりません。現在は近くにロケットの打ち上げ基地があるそうですが、当時ほとんどない状況だったはずで、1966年から1977年は文化大革命の時期です。後に中国政府の最高幹部になる理工系の学生たちの多くは、大学卒業後、地方に職を得ました。出て行ったのか出されたのかは知りません。酒泉地質隊で仕事をしていた期間に、蘭州大学地質地理学部の卒業生で、甘粛省地質局に勤めていた張培莉と結



第3図 中国地質博物館の館蔵文物珍品展会場入り口正面の大きな写真。毛沢東の「開発鉱業」の書が掲げられています。



第4図 周恩来の「地質是先行」の発言の記録。

婚したとの記載もあります(が)。

その後、蘭州の甘肅省地質局に転勤します。ここでも、何の仕事をしたのかもわかりません。ただし、ここで、省の最高責任者、第一書記の宋平に地質局副主任(原文のまま、ネイサン・ギリ(2004))に抜擢されるという事態が発生します。これは、鄧小平の政策によるもので、全国規模での若返り、知識化、専門化などをめざした人材発掘のための人事でした。このとき、宋平は、もう一人重要な人物も抜擢していました。胡錦濤です。この当時は、この若い二人はお互いの存在を知らなかったということです。

次の職場は北京の地質鉱産部でした。部は、日本の省に相当します。北京に引き抜いたのは、地質鉱産部長、孫大光です。彼が甘肅省を視察したときに、案内者になったのが温家宝だったということです(ネイサン・ギリ, 2004)。

地質鉱産部は、1982年に地質部が名前を変えた組織で、その後も1988年、1993年、1998年と機構改革が繰り返され、現在、国土資源部(The Ministry of Land and Resources P.R.C.)中国地質調査局(China Geological Survey)に改組されています。ここで何をしたのかもわかりません。北京の地図には中国地質調査局の建物が2ヶ所に記されています(第2図)、どこで仕事をしていたのかもわかりません。中国地質調査局は職員数が万のオーダーの巨大な組織です。この後は、中央政界入りし、仕事の場所を中南海に

移し、紆余曲折を経て出世の道をたどります。

5. 証拠物件

ひとつだけ痕跡を見つけました。中国地質博物館(坂野(2007)に紹介があります)を訪れたときのことです。4階に特別展示がありました。中国指導者と地質の関わりが示されていました。展示場の正面には毛沢東の写真がありました(第3図)。何か書いてありましたが、達筆なので読めませんでした。下の説明によれば、1950年にソ連大使館で留学生に請われて書いた「開発鉱業」の4文字でした。周恩来の展示もありました。1970年に館を訪れた時の「地質是先行」という発言が記されていました(第4図)。写真の説明は、館内で鉱産標本を見ているところ、とあります。江澤民の書もありました。第5図の左から、「献身地質事業無尚光栄」(1991年)「合理開発利用資源促進経済持続発展」(1996年)と書いてありました。その右は李鵬で、「開発保護鉱産合理利用資源」(1996年)とあります。

そして温家宝氏の分ですが、彼の場合、写真や書のほかに、ケースに入った実物の展示がありました。左に水晶があります(第6図)。中国語がよく読めませんでしたので、後で博物館に確認したところ、その標本のことをよく覚えている人がいたらしく、1985年に氏から寄贈された水晶で、産地は甘肅省ではなく、遼



第5図 江澤民の書.



第7図 温家宝が使用した地質調査関係用具.



第6図 温家宝が地質博物館に寄贈した水晶.



第8図 温家宝の野帳.

寧省であることがわかりました。1985年と言えば、氏はすでに地質鉱産部の副部長であったときのことです。その隣には使い込まれて変形した水筒と調査かばん、そしてルーペの下に野帳が2冊広げておいてあります(第7図)。野帳のうち、上の1冊には左のページに鉱物のスケッチ、右ページに漢字で鉱脈鉱床と思われるものの記載があります。下の野帳は、最初のページが開かれており、持ち主の情報が記されています(第8図)。

国家地質総局
地質局 隊
野外記録簿

番号 011

工作地区 甘肅省地質局
姓名 温家宝
通訊所 蘭州市定西南路
日期 1982年4月10日
至 1982年6月30日

1982年というのは、甘肅省地質局の副局長時代です。現場で仕事をしていたのかわかりませんが、2冊の野帳は別の年代のものかもしれません。

数字と記号以外は全部漢字で丁寧に書いてあります。当たり前か、字を書くのが苦手な筆者のような人間には耐えられない世界です。文字発祥の地ですか



第9図 人民大会堂内の鉱物標本「万宝山」。

ら、字が上手な人がいるのは当然なのでしょうが、墨書の場合、温家宝の文字が使われていました。

なお、本報告では、文字は現在の日本人に読みやすいように変えてあります。間違いがありましたらご容赦ください。それにしても毛沢東の書は、あれは、ちょっと。

6. 地質と政治(家)

中国の国会議事堂、人民大会堂2階の大会議場入り口脇には大きな鉱物標本が飾ってあります(第9図)。万宝山と書いてあります。貴州省の鉱山労働者が二十世紀六十年代に人民大会堂に寄贈したもので、辰砂、白雲石、水晶、方解石等の珍しい綺麗な石からなるので、万宝山と名付けられたと説明されています。中国東北部の戦争にからむ地名と同じですが、全く関係なさそうです。地下資源に対する中国国家の意気込みの象徴と解釈しました。

石原・村上(2006)の紹介、「中東に石油あり、中国に稀土あり」(鄧小平の書)や、堀(2006)の分析にみられるように、中国は、毛沢東の時代には考えられなかった、現在の世界の産業界の動向を左右するような地下資源の保有割合が高いのです。おのずと意気込みは違うのでしょうか。1996年に北京で開催された国際地質学会議の開会式には李鵬首相が出席したということです。一方地質災害の分野では、フィリピンのピナツボ火山の研究成果集の巻頭言がフィリピン大統領によって書かれています(Newhall and Punong-

2008年5月号



第10図 周口店の地震観測施設。
裏から見たところ。北京原人の遺跡は左奥に散在しています。



第11図 周口店の地震観測施設内の温家宝のポスター。

bayan,1996)。それぞれの国の、その時々地質屋の社会的地位が表されています。

国家指導者と地質との絡みは、先に地質博物館の展示のところに記しましたが、周口店にもありました。北京原人の骨の発掘地点です。この一角に、周口店遺址博物館とは別に地震科普館という施設があります(第10図)。入り口前には古代中国の地震計、地動儀の大きな複製が鎮座しています。防震滅災科普教育基地と刻まれた石碑もあります。建物の中には地震災害に関する展示と地震観測施設があります。建物に囲まれた中庭に面した壁面には地震学者のポスターが張り巡らされています。入り口に一番近い一等地には日本の地震学者茂木清夫氏の大きな説明板がありました。建物の中には、温家宝が訪問したとき

の写真があり、ポスターの表題は「周口店は地質工作者的揺籃」でした(第11図)。周口店は中国の地質学発展の地でもあり、ここには中国地質大学の実習拠点があって、その50周年記念式典に先輩温家宝がこの地を訪れ、学生たちに会ったらしいのです。地震災害もしくは観測について周恩来が民衆に演説をしている写真もありました。

7. 終わりに

顔と名前の両方でこれくらい得をしている人はいないでしょう。穏やかに見えます。暖かい感じがします。やさしそうです。中国サイドの情報は、おおむねそんな感じです。人民中国によれば、高学歴であるにもかかわらず学歴を誇るようなことはなく、人に対して謙虚に学んだこと、地方を視察するとき、事前に予定されていないところでよく車を降り、住民と話し合い、民衆の考えを理解したがっていたこと、大晦日に炭鉱を訪れ、地底の採炭現場で労働者に生産や安全などの状況を尋ね、坑道車のレールの上に車座になって一緒に年越しの餃子を食べ、労働者が感激したことなどのエピソードが紹介されています。最初に引用した就任時の新聞記事の中で、信任投票の賛成票が非常に高かったのはその辺の人当たりのよさ由来するのかもしれませんが。

一方、日本人が書いたインターネット上の文の中では、天安門事件後、自己批判したことによって中枢に生き残ったというようなことが書いてあります。情報は多くありません。

中央政界入り後の仕事は、金融、農村問題、貧困地域の開発、洪水・早魃対策、緑化、環境問題などです。特に1998年の武漢付近での長江の洪水に際して陣頭指揮をとって災害軽減に貢献した様子が多くの国民の印象に残ったようです。

自然災害対策など、かつての専門に近い分野もありますが、政界入り後の主たる担当は金融と農業、特にマクロ経済だったそうです。勉強しなおしたことになります。大学に入って地質の勉強を始めてからの25年間、彼が実際に何を考えどんな地質の仕事をしてきたのかを伺い知ることは出来ませんでした。したがって、その経験が現在の彼にどう影響を及ぼしているのかなど全くわかりません。

その辺を紹介した記載があることはありました(ネイサン・ギリ, 2004)。温家宝は、巨大プロジェクト三峡ダムの工事の式典に参加しませんでした。この著者たちは、温家宝が長江の水を黄河流域に引く「南水北調」計画に疑問を持っているからだという解釈をしています。水を移す以前に保水が必要であり、水の消費以前に環境保全が必要であるというのが温家宝の主張であり、不毛の大地が広がる甘粛の若い地質学者時代の経験が反映されているのだとも記されています。確かに、この温家宝の主張はほかの報告類にも記されています。しかしながら、三峡ダムの式典には、現在の中国政府首脳は、なぜかほとんど出席しなかったということなので、もう少し考察が必要かもしれません。

筆者は純粋に野次馬的精神から本文を書きなぐりました。わが国には所内を含め中国の地質学界の事情に精通した方々がおられます。そのような方に、もっと詳しい記述を促すために無知をさらして書きました。呼び水になれば幸いです。

中国地質博物館および周口店に関する事前の情報は元産総研の豊 遙秋、産総研の坂野靖行両氏に教えていただきました。博物館ではJia Zhongpeng氏の紹介により、江楠、Fu Cun yangの両氏にお世話になりました。末尾に記して感謝の意を表します。

引用文献

- アンドリュー・ネイサン、ブルース・ギリ(2004):中国権力者たちの身上調査。山田耕介訳、阪急コミュニケーションズ、296p。
 坂野靖行(2007):中国地質博物館に寄贈された豊 遙秋鉱物標本。地質ニュース、630、67-72。
 堀 琢磨(2006):レアメタルに関する調達セキュリティ確保のための鉱種別戦略。地質ニュース、623、21-41。
 石原舜三・村上浩康(2006):レアアース資源を供給する鉱床タイプ。地質ニュース、624、10-29。
 高 文謙(2007):周恩来秘録 上。上村幸治訳、文芸春秋社、400p。
 Newhall, C. G. and Punongbayan, R. S. edited (1996): Fire and mud, Eruptions and lahars of Mount Pinatubo, Philippines. Philippine Institute of Volcanology and Seismology, Quezon City, University of Washington Press, Seattle and London, 1126p.

SUTO Shigeru (2008): A geologist, Wen Jiabao, the premier of the People's Republic of China.

<受付:2007年9月21日>